

徳田秋声とイプセン 附—秋声「エリイダと日本の女」翻刻—

森 英一

日本近代文学におけるイプセン受容と移入について、藤木宏幸はこれを四期に分けて考えるのが便利だとしたが、そのうち第二期はイプセンの没した明治三十九年（一九〇六）から大正初期にかけてで、イプセン全盛の流行時代であるとした（「イプセンの受容」『現代文学講座・明治の文学Ⅲ』昭和五〇年四月）。中村都史子はその第二期を象徴したタイトルの研究書『日本のイプセン現象——一九〇六—一九一六』（一九九七年六月刊、九州大学出版会）を刊行し、森鷗外や上田敏、坪内逍遙、小山内薫、島村抱月、岩野泡鳴、夏目漱石、中村吉蔵等々とイプセンとの係わりについて具体的に考証した。

徳田秋声におけるイプセン受容はどうか。秋声は明治二〇年代以降翻訳されたイプセン作品を読み出し始め、近代劇協会の舞台を観、いわゆる〈新しい女〉について発言したりしている。それに関する発言は明治大正昭和の三代にわたるが、先の第二

期に多数見られるところから、以下それを中心に受容の様相を述べてみたい。

秋声のイプセンに関する発言は(1)作品評（自作への影響）(2)劇評、(3)いわゆる〈新しい女〉についてのもの、等に分類でき

る。まず(1)から観ると、「予が出世作を出すまでの苦心」（大正三年三月『中央文学』）に「桎梏」（明治三六年二月『新小説』）をイプセンの影響で、「夫人の自覚といふやうな問題を取扱つた」と述べているのが注目される。では、「桎梏」がそのような作品かという点、女主人公・屋代志津子が弟の学費を工面するため、妾となる。後日それを知った弟・貞也は姉の新出発を願うが、姉は仕舞いに自害し、弟も安定した職を捨ててしまうと

いうもの。秋声が回想するような内容とは程遠いといわざるを得ない。むしろ〈夫人の自覚〉というテーマならば、ほぼ同時

期発表の、私生児をもうけたにもかかわらず自立の道を歩む冬子を造型した「春光」(同二五年八月『文芸界』)が近い。

また、小田垣憲という強気の性格の人物を中心に子爵家の内紛を描く「少華族」(明治三七年〜三八年『万朝報』)について「創作生活の二十五年」(大正九年一月同上誌)ではイブセンの影響を言いながら「わが文壇生活の三〇年」(大正一五年三〜六月『新潮』)ではニイチエを指摘する。ということは、双方の作家とも決定的な影響ではなかった事を意味する。

早い作家的出発にも係わらず、秋声が自他共に作家として認められるには明治四〇年以降まで待たねばならない。その間、秋声は得意の語学力を生かした多数の外国文学を読み漁る。モーパーサンやユーゴー、ドデー、ゴリキ、ツルゲーネフ等々。おそらくイブセンもその中の一人だった、と取り敢えずは言えるのである。

次に(2)について観ると、初めてのイブセン劇の上演「ジョン・ガブリエル・ポルクマン」を秋声は観劇していた可能性がある(「一問一答」明治四二年九月『新潮』)。また、大正元年十月の近代劇協会の「ヘツダガブラー」は初日に観劇している。さらに、芸術座の「海の夫人」に関して「徴」(明治四五年一月刊 新潮社)との係わりにおいて記述の都合上(3)で述べた。ただ、須磨子の演技に関して「上手になつたが最う少し根

本的に改造する必要がある」と厳しい批評を与えた(「公開よりも寧ろ内輪な試演が望ましい」大正三年三月『新潮』)。

最後に(3)について述べる。先の第二期のイブセン受容がちょうど「青鞥」の運動と重なるところから、イブセンは劇作家あるいは劇詩人としてよりも強烈な自我を持ち、偶像破壊をめざす新思想家としての一面が強調された節があり、秋声の人物評も「新しい女」が是か非かという観点から発言されている。中で「イブセンの戯曲中で一番同感のできる性格」(「読後雑感」明治四五年二月二十九日『時事新報』)と述べたり、「ヘツダ・ガブラー」中の主人公について好意的発言をみせているのが注目される。この作品については劇を観たり、戯曲を読んだり、メレジュコフスキーのイブセン論を読んだりしているの、かなり理解を深めた上での発言と判断できる。しかし、何故そのように考えるのかという理由については、正宗白鳥「毒」を評した「毒を読む」(明治四五年七月一七日『国民新聞』)が参考になる。ここで秋声は「毒」中の人物の気分がヘツダと通じるものがあるという。ちょうど「徴」の執筆時期に重複するため、同作に影響を及ぼしたと推測される。この辺りのことは小著『秋声から美美子へ』(一九九〇年一〇月刊 能登印刷

出版部)で述べたので繰り返さない。

しかし、越智治雄『明治大正の劇文学』(一九七一年九月刊 瑞書房)で考察されたように、明治四〇年前後の「ヘッダ・ガブラー」に関する発言は喧しい。それらは、ヘッダを嫉妬心の強い強情な女とだけ見るか、それとも自己の確立という問題を内面に抱えた女と見るかに大別されるが、秋声のものはどちらでもなく、自身の関心で読解しているのである。

ところで、「海の夫人」を論じて「人形の家」のノラよりもエリイダに高い評価を与える「エリイダと日本の女」(明治四五年五月『台湾愛国婦人』)がより注目されてよい。ここにおける秋声の主張は次の箇所に要約される。

自覚といふ事は必ずしも家庭の破壊を意味しないのである。又最愛の夫や子を捨てる必要もないのである。要は心の持方如何にある。エリイダが今までの夫婦の生活を、眞の生活ではないと自覚したのはいゝ。併し自己の責任を痛感して、生活の改造を企てやうと決心した態度は愈々立派だと云はなければならぬ。わが国の女性中にも、女子教育が盛んになるに連れて、段々所謂「醒めたる女」が殖えて来たやうであるが、それはどうもエリイダの場合の第一の覚醒だけであつて、第二の覚醒には遙かに遠いやうなのは心細い。お刺にそ

の第一の覚醒でさへ頗る薄弱な根柢のぐらついた奴で、中々突き詰めた処までは行き得ず、稍もすれば元の無自覚な態度に復帰しやうとするのだから情けない。まだく日本の女は苦勞が足りない。精神の試練が足りない。

ここに観られるような考え方はこれ以前のエッセイ「婦人の自覚に就て」(明治四四年一月『早稲田文学』)や同時期の談話「表情ある話振り」と雅かな態度」(同四五年五月『婦人画報』)にも見られる。前者は「新しい女とか、自覚した女」は思想上の要求から出た幻のようなもので、現実生活ではそれに対応する制度ができていない以上、彼女と生活を共にすることは不可能である、という事を主張する。後者では、ノラのような女に好意を持つ事はできないと言ひ、女性には「女らしさ」が大切と言ふ。その場合の「女らしさ」とはたとえ夫に従順な場合でも「女子の天職に対する深い自覚と了解」を持ち、逆に自由解放を叫ぶ場合でも女性として「天より恵まれたる勤めを果たす」ことを忘れない場合をさすと言ふ。

こうして見てくると、「エリイダと日本の女」での考えが秋声の本来のものと考えられる。というのも、これらとほぼ同じ頃の「小説眼に映じたる現代の美人」(明治四四年三月『美人画報』)において秋声は、自分が好んで描く女は経験上「中流

か中流以下の所帯に疲れた寂しい女と述べているからである。

最後に、秋声はハウプトマン「寂しき人々」とイブセンとを比較して「其後イブセン物なぞも読んで見たけれども、感動させられる度はあれ程強くなかつた」(大家の翻訳よりは若い人の翻訳)明治四三年八月『文章世界』)とも述べている。ハウプトマンは他にも田山花袋や島崎藤村、三島霜川、泉鏡花等々明治三〇年代以降に多数の作家に影響を与えるが、この一文は秋声にとつて少なくともハウプトマンがイブセンよりも「大きい」存在である事を示す。もちろん、かといつてイブセンの影響を無視するのではない。イブセンとの邂逅が「徹」執筆の参考となつたし、「新しい女」のようなタイプを知る事によつて自身の女性観の幅を広げることが可能になつたはずで、その意味ではイブセン体験が相当の意味をもつのである。

(付) 小稿は平成二三年一月一日に石川近代文学館での発表「徳田秋声とイブセン」の要旨と重複する。その際に配布した資料に「エリイダと日本の女」を一部翻刻したが、今回その全文を紹介したい。なお、これ以外の秋声文は八木書店刊『徳田秋声全集』に拠る。

(本学教員)

翻刻 徳田秋声「エリイダと日本の女」

「解説」本文は『台湾愛国婦人』第四三卷(明治四五年五月一日発行)二五頁〜四〇頁。二段組、一頁一七行、二二一文字。カットを付すのが六頁ある。総ルビ付。所蔵は旧成東町歴史民俗資料館(現山武市歴史民俗資料館)で、同館は同誌を一四冊所蔵している(第一三、二五、二八、二九、三一〜三四、三七、四一、四二、四八、五四、五五卷)。

今回の翻刻に際して、一段組み、パラルビとし、カットも略した。また、旧字体は新字体に直したが、仮名遣いはそのままとした。明らかな誤字は正した。

エリイダと日本の女

徳田 秋声

イブセンといふ名を我々が耳にし始めてからもう大分久しくなる。この二三年間にはその戯曲の四つまでが新しい抱負を持つた俳優に依つて演ぜられた。特に昨年末の文芸協会所演の

「人形の家」は、このノオルエエの文豪のフェミニストとしての一面を最も顕著に代表してゐる作なるがため、さうして主人公のノラに扮した女優が、近來続々として崛起し來つた女優中にあつて、際立つて優れた技倆を示したため、この演劇は非常な評判となつた。さうしてこれまで多く机上の人として知られてゐたイブセンといふ人が、一層我々に親しいものとなつて來た。

「人形の家」は、何故にイブセンの作中にあつても特に喧伝されてゐるのであるか。それは作者が今までの寧ろロマンチックな態度を捨て、所謂社会劇に入らんとした最初の注意すべき作品なるためにもよらう。併しながらそれよりも有力なる原因は、この一篇が提供する問題の意義にある。換言すれば、女主人公ノラの覺醒、及びその結果としての家出が、婦人開放と稱する痛切な婦人問題に触れてゐるからである。

「人形の家」が非難されたり攻撃されたりするのは、多くはこれに基因してゐる。併し私はここに「人形の家」に就いて論じやうとするのではない。成程、ノラが今迄夫から愛されてゐたのは、可哀い人形としてゝあつて、決して獨立した一個の妻としてゝはなかつた事を自覺して、住み馴れた家を出て行く動機には、痛い涙が含まれてゐる。けれども、あゝする事に依つて果してノラは自分自身を知る事ができるだらうか。若しく

は本当の生活を知る事ができるだらうか。自己を知り、人生を知るには、最愛の夫と子とを振り捨て、「世間」へ走らなければ駄目なのであらうか。よしこれが唯一の手段なりとしても、ノラはいつまでそれに耐へる事ができるだらうか。又考へ直して元のわが家へ戻つて來るやうな事はあるまいか。疑問は続々として発して來る。「或る奇蹟が起つたなら——」ヘルマアのこの詞は、意味と暗示とに富んだ詞である。

どうも日本の女には、よしそれが所謂醒めたる女にしても、ノラ程思ひ切つた事はできさうもない。又さういふ事を私は敢て望まないのである。私は「人形の家」よりも、同じ作者の後年の戯曲たる「海の夫人」に心を引かれる。これはイブセンが夫婦の關係に對する今一つの考へ方とも見られやう。或は又、前者に於いて解決し尽されなかつた問題を、この作で解決しやうと試みたものだとも云へやう。兎に角「海の夫人」の女主人公エリイダの性格は、ノラの如く直情径行でない、遙に控へ目で、さうして質実である。だからノラのやうに派手な刺戟は与へ得られないが、沁々と味ひながら考へて見させる力がある。我々日本人としてはさうして日本の家庭の現状を頭に置いてはどうしてもノラよりかエリイダの方へ心を引かれるのである。一わたりこの戯曲の梗概を語つた後、女主人公の性格を考へて見たいと思ふ。

全体は五幕から成り、北ノオルエエの入江に望んだ小さな町を舞台に取つてある。期節は夏。第一幕はワングルといふ医者
の庭で、二人娘のボレッタ、ヒルダの姉妹が、今日は亡き母の
誕生日だからといふので、旗や草花でその辺を装飾してゐる傍
に、バレストッドといふもういゝ加減な年輩の画家が絵を描い
てゐる。そこへリングストランドといふ彫刻をやる病身の青年
がやつて来る。画家は彫刻家に、自分の描きつゝある画の題を
「人魚の死」といふのだと告げ、これがヒントを与へてくれた
人はこの家の奥さんだと語る。この奥さんといふのが一篇の女
主人公エリイダの事なのである。

聽きかて画家は行つてしまふ。ヒルダは彫刻家から、なぜテーブ
ルの上を花で飾るのかと聞かれて母親の誕生日だからと告げ
る。彫刻家はそれをエリイダの事だとばかり思ひ込む。処が娘
達の積りはさうではない。エリイダは彼等二人には継母に当る
ので、二人は継母の目を忍んで亡き母の誕生日を記念してゐる
のである。彫刻家は辞し去る。

その後へ主人ワングルが遠出の診察を終へて歸つて来た。間
もなく学校教師のアルンホルムといふのが、エリイダの故郷シ
ヨルドキツクから到着した。これは主人が、妻のエリイダが兎
角近頃鬱ふさき勝ちなるを見、曾て女を後妻とする際に、女が自分
から、私は以前一人の男を恋してゐたと告白した事を思ひ出し、

それがついきりこの学校教師に違ひないと見当を付けて、それ
でわざ／＼出向ひて貰つたのである。荒海に臨んだシヨルドキ
ツクに人となり、「海の夫人」と綽名を取たエリイダに、懐し
い故郷の話懐しい人の口から聞かせたなら、少しは胸の結ば
れも解けやうかと想像して。しかも事実はそれとは全く反対に、
教師は曾て自分の意中をエリイダに云ひ送つて、却つて女の方
からはねつけられた人なのである。それよりも姉娘のボレッタ
が、曾てこの人に胸を焦した事がある。それは娘がまだ小学校
へ通つてゐて、この人がその教師であつた時分に。

エリイダが濡髪を垂らしたまゝ、海水浴から歸つて来る。さう
してこの辺の内海の水の妙に生温い事を不平さうに語る。主人
が奥へ行く。エリイダと教師と二人残る。そこへさつきの彫刻
家が花束を持つて来て、誕生の祝ひにとてエリイダに呈する。
エリイダはそれが何の意味だか一寸解釈に苦しんだが、相手の
詞に依つて、二人の娘が自分に隠れて、亡き母を記念してゐる
といふ事を知る。併し彫刻家にはそれに依つて惹起された心の
苦痛を現さないやうにして、快く花束を請取る。

彫刻家は自分が製作しやうと考へてゐる群像に就いて語る。
それは或る海員の妻が夫の不在中に不貞な事をした処、夫の姿
が女の夢の中に現れて、女がひどく良心の苛責に苦しめられる
といふ構想なのである。彫刻家はこれを自分の實際上の経験か

ら得たものだと告げた。エリイダは熱心にその所謂経験を聞かうとする。そこで彫刻家は次の如く語つた。

彫刻家がまだ今の職業に身を献げない頃、一個の海員としてイギリス海峡を通過した事があつた。同僚にアメリカ人と称する一人の男があつた。彼はノオルエエ語を覚えるのだからと云つて、いつもその詞で書かれた古新聞を読んだ。或晩その男は新聞を読みながら血相変へて呟いた「他の男と己の留守中に結婚した。併し彼は己の女房だ。女房にしずつにおくものか」と。彫刻家を乗せた船はその後難破の憂目に会つた。彫刻家は幸にして身を全うする事ができたけれど、アメリカ人その他で乗り遷つたボオトは遂に今日までその消息に接しない。あの男はきつと死んだに違ひないと彫刻家は語つた。エリイダは思はず戦慄した。

第二幕は町の後方の高台である。ワングル夫婦は同じ日の夜、牧師等を案内してこゝへ来たが、牧師が娘や彫刻家と附近を見物に出来かけたので、後には夫婦二人だけが残る。ワングルはエリイダの此頃の憂鬱な状態を心配して、お前には山に取囲まれたこの辺の重苦しい空氣が適當しないのだから、当分故郷のシヨルドキツクへ歸つて、心の限り潮の香に浸つて来たがよからうと説く。

するとエリイダはもう何もかも包まずお話するとて、あなたから結婚の申込を受けた時、私には一人の思ふ人があつて、その人とは一度結婚の約束まで取交した事があると打明けた事を、覚えてお出でになるだらうといふ。ワングルは、それは牧師だらうと訊く。エリイダはそれを否定して、自分の約束したのは、シヨルドキツクへ修繕のために這入つて来た、或るアメリカ船の二等運転手だつたと語る。

この男はフィンランド生れでフリーマン(又はジョンストン)と呼ばれてゐたが、エリイダと会つたのはさうちよいくではない。会ふたんびに海の話をした。嵐の話、風の話、海上の夜、海上の日の出、鯨、海豚、海豹、海豹、鷲、さういふ話が不思議とエリイダの心を蠱惑した。さうして男からお前は私と結婚の契約を結ばなければならぬのだと命ぜられるがまゝに、唯々としてそれに従つた。

或日女は男から、某といふ岬まで来てくれるといふ手紙を取つた。女はその通りそこへ行つた。すると男がそこに待つてゐて、自分は昨夜故あつて船長を殺したから、これから逃亡する処だ、併し自分達二人は海と縁組しなけりやならないと云つて、二人の指輪を抜いて繋ぎ合はして、それを海中に投げ込んだ。

男が去ると、エリイダは初めて正氣に歸たやうに、今までの

事が馬鹿馬鹿しくなつて来た。そこで男の行つてゐる先へ宛て、今までの事は夢と諦めてくれと云ひ送つた。併し男の方は丸でそんな手紙は受取らないもの、やうに、お前を呼迎へる支度ができたらすぐ知らせるから、さうしたらすぐ来いと云つて来た。そこで女は折返し絶交のことを云つてやつたが、又同じやうな手紙が来たのでそれ切り何も云つてやらなくなつた。併し男の方からはその後数回音づれがあつた。それに依ると、彼はアメリカから、支那、濠洲等を放浪して歩いたらしいのである。

エリイダはそれからワングルと結婚して、次第にその怪しい男の事を忘れてしまつたが、三年前、子供の生れる少し前から、男の幻が再び眼前にチラつくやうになつて来た。生れた子供は間もなく死んだが、エリイダはそれからといふもの、妻としてワングルと同棲する事を拒んだ。それは子供の眼の色が、怪しい男そつくりのやうに思はれて、恐しくてならなかつたからである。彫刻家の語つた処から思ひ合せて見ると、幻の現れ始めたのが、丁度彫刻家等を載せた船が難破した時分に当るのである。それだからエリイダは、話を聞くや否や、アメリカから来た海員といふのは、てつきりフリーマンだと思ひ込んだのである。幾ら故郷の海気に浴して見たからとて、私の不安が除かれる筈はないと、絶望したやうにエリイダは夫に語つた。

第三幕は往還に面したワングル家の後園である。初め教師のアルンホルムとボレッツタだけがある。ボレッツタは傍の小きな池を指して、私は丁度この中にゐる鯉のやうなものである、すぐ傍に自由自在に遊び廻れる大海がありながら、空しく小さな世界に閉ぢ込められてゐると同じやうに、私もこんなけちな町に埋れて、一生広い世界を見ずに終らなければならないのだと啣つ。

そこへエリイダがやつて来て、人間は本来からいふと海に住むべきもので、それが誤つて陸上の動物になつてしまつたものだから、永久に悲哀が絶えないのだなど、いふ、聽てエリイダが只一人になると、往還に面した低い塀を股いで、異様な男がぬつと女の前に立つた。それは十年前の怪しい男だつたのである。さうしてエリイダに向つてあなたを連れに来たのだといふ。女が、今は私も結婚した身だからあなたを連れに来たのだといふ。告げて、少しも耳に入れやうとしない。

ワングルがやつて来た。エリイダは夫の蔭に身を隠す。併し怪しい男は相変らず平然として、指輪の件も一種の結婚である。だからこの女は私の物だとして、明晩船が出帆する前に今一度こへ来るから、女自身の意思に従つて、私と一しよに立つとも立たないともその時まで決定しておくがいいと云ひ捨て、そのまゝ不意と立ち去る。

その跡へヒルダと彫刻家、ポレッタと教師が来る。彫刻家は、たつた今こゝへ来る途中で、昨日お話し、たアメリカ人を見かけた。死んだとばかり思つてゐたに不思議な事があるものだといふ。エリイダは真蒼な顔をして、あの人には非常に私を蠱惑する力がある。丸で海のやうな人だと呟く。

第四幕は、ワングル家の一室である。彫刻家とポレッタとで結婚の話をしてゐる、結婚は一種の奇蹟ともいふべきもので、女の方が次第に男に化せられて夫に似て来るものだといふ。ポレッタは、その反対に、夫が妻に化せられるといふやうな場合はあるまいかと聞く。彫刻家はさういふ事はないと答へ、男には事業といふものがある。女もやっぱり男の事業のために生きるので、常に男の傍にあつてその労力を軽くし、男の生涯を愉快に幸福にすべきものだといふ。

彫刻家は更に語を次いで、私はこれから南方の国へ旅立たうと思ふが、たとひ私が去つた後もどうか私の事は忘れないでくれ、この淋しい田舎町で、私の成功を祈つてゐてくれるあなたのやうな優しい人があるといふ思想が、私の心を励まして、どれ程速に私の技術上の進歩を促すか知れないからと望む。ポレッタは優しくそれを諾する。そこへ学校教師が訪ねて来る。

ワングルが居間から出て来ると同時に、若い二人は庭へ散歩に行く。主人と教師はこれからエリイダの事に就いて相談しや

うといふのである。教師は既に昨夜主人から怪しい男の事は聞いて知つてゐるのである。主人は教師に、エリイダが教師を慕つてゐるとばかり思ひ込んで、わざ／＼来て貰つた事まで打明ける。そこへエリイダが出て来たので教師は席をはずす。

エリイダは決然として、かうなつたからにはお互に欺く事はやめませうとて、一体私達二人の一しよになつたといふ事が不幸の原因なので、私達の結婚は本當の結婚ではなく、謂はゞあなたが私を買つたのも同然だといふ。さうして更に、夫の呆れ顔を見ながら、あの時分は私もどうする事もできない境界にあつたものだから、一生扶持してやらうと仰やつたあなたの詞に動かされて、浮々結婚したのであるが、今になつて思へばさうすべきではなかつたのである。結婚してからこの方、あなたは実に親切にして下さつて、私もそれは心から有難いと思つてゐるのであるが、何よりも自分自身の心でここへ来なかつたのが残念だ、二人の今までの生涯は決して本當の夫婦の生涯ではなかつた、あの不思議な人との約束こそ本當の結婚であつたのだ、だからこれまでの二人の關係は帳消しにしてどうか私を自由な体にして下さい、さうして人妻たる桎梏の下から免れて、自分の意思のままの選択のできる身分にして下さいと願ふ。

それでもワングルは、どこまでも私はお前を保護して見せると主張する。エリイダは、自分の恐怖は自分の胸の底にあるの

だから、あなたの力には及ばないと答へる。ワングルはお前はあの男を愛してゐるのかと聞く。エリイダは、それはどうだか分らないが、兎に角私はあの人が怖くて怖くて仕方がない、それでゐながら、あの人と一しよでこそ自分の故郷にあるやうな気がしてならないのだと答へる。そこへ教師や娘が庭から這入つて来たので、ワングルは人々に、妻は明日シヨルドキツクへ行く事になつたと告げる。

第五幕は第三幕と同じワングル家の後園である。エリイダが怪しい男と出会ふべき時間は近づいた。ワングルはこゝでも妻の心を纏さうと力めるけれど、相手はどうしても会ふんだと云つて聞かない。やつとの事で、まだ少し時間があるからとてそこから散歩に連れて行く。

その跡へ教師とポレッタとが来る。教師はポレッタに、あなたが世間を見たがつてゐるから、どうかしてその希望を実現させたいと思つてワングル氏とも相談して見たが、目下の状態ではとてもそれは出来ないとの事である、併しあなたさへ厭でなくば、あなたの希望は私の力で叶へて上げたいがどうかと聞く。ポレッタは大喜びである。ひよつとかして、誰かあなたを束縛するやうな人はないかと聞かれると、そんな人は一人もないと答へる。教師は安心して、ではどうだらうあなたは生涯私に一身を託する——詰り、妻になつてはくれまいかと申出る。ポレ

ッタはびつくりして、それは到底出来ない事だと断る。

教師は失望したやうに、私が今度こゝへ来たのはあなたのためなのである。それはワングル氏から自分へ宛てた手紙の中に、この土地で或る若い婦人が自分の事を思つてゐると書いてあつたが、それをあなたとはかり思ひ込んだのであつたと語る。さうしてよしあなたは私の乞ひを容れてくれなくとも、世間へ出やうといふあなたの希望は必ず達せさせて上げると誓ふ。併しポレッタは、かうなつたからには、どうしてあなたのお世話になる事ができませうと辞退する。教師は色々とこんな処に埋れ果てる事の味気なさを語る。ポレッタは段々心が動いて来て、遂に昔の教師にして且つ秘に心に慕つてゐた人の妻たる事を語る。

驢でワングルとエリイダとが歸つてきて、舞台は又この二人だけになる。怪しい男は約束の通りに現れた。さうして出立の用意はいゝかと聞く。ワングルは溜まらなくなつて、飽くまでさういふ風にでるのなら、妻から聞いた十年前の船長殺害事件を公にすると強迫する。併し怪しい男は少しも騒がず、静にポケットから短銃を出して見せ、そんな事をされる位ならその前に自ら所決する、自分は死ぬるも生きるも自由な男だと空囁く。エリイダはワングルに、あなたは私の夫だから、私の体に束縛を与へる事はできるだらうが、私の心まではどうする事もでき

ないと激する。

ワングルも到頭決心した。そこで、お前を救ふ道は私には尽きたから、私は今即座にお前との取引を帳消しにする、お前は勝手に自分の採るべき道を選ぶがい、それもみんなお前を深く愛する余地だといふ。エリイダは愕然として、あなたはそれ程までに私を愛してゐて下さつたのか、それを少しも私は知らなかつたのだといふ。ワングルは更に、今こそお前は私の束縛から離れた身になつたのだから、自由に、且つお前自ら責任を帯びてどうともするがい、と云ひ切る。この「責任」といふ詞が女の頭を異常に動かした。「それぢや事情が一変して来ます」とて夫に縋り、決然として怪しい男の申出を斥ける。こゝには私の意志よりも強いものがあるのだと云つて、怪しい男は遂に去つてしまふ。

エリイダは生れ変つた人のやうに喜んで、これからは自分の自由に、自分の心から、責任を帯びてあなたの物となる事ができると云ひ、二人の娘達もまださうではないが、先へ行つてはきつと自分の子供に見せると誓ふ。そこへ二人の娘を始めとして、教師、画家、彫刻家がやつて来る。ワングルは人々に、妻が急にシヨルドキツク行を中止した事を告げる。人々は何がなし愉快な軽い気持になる。

これで一篇の戯曲は終りを告げるのである。梗概の方が余り

長くなつたから、極く簡短に私自身の意見を述べて、筆を擱く事にしよう。勿論賢明なる読者は、不完全な梗概の中に於いてさへ、作者イプセンの深意が那邊にあるかを推測し得られやうから、さういふ人には私の意見などは全く蛇足に過ぎなからうけれど。

一体エリイダといふ女は海辺に人となり、「海の夫人」とまで綿名されたゞけあつて、殆ど海その物の化身かと怪しまれる程に、海洋の気が骨の髄まで染み込んだ女なのである。フリーマン若しくはジョンストンと呼ばれる男は、えたいの知れぬ怪しい男であるが、イプセンはこの男を以て海の魔力を象徴しやうとしたのではあるまいか。その行動から見ても、云々から見ても、なんだかひどく現実離れがしてゐる。三幕目の終りに「あの人は海のやうです」とエリイダがいふが、この詞には深い意味が含まれてゐると思ふ。海の魔力その物なればこそ、海の子なるエリイダが、全く自己の意思を失つて苦もなくその誘惑に打ち負けたのである。

併しながら海の魔力は、或る事情からして暫時^{しばし}その力を弛めなければならなかつた。この間に陸の力がエリイダの上に働きかけた。女は到頭その方へ引かれて行つた。併し周囲の状態は「海の夫人」たるこの女に適しなかつた。女はどこまでも、「若し人間が最初から海の上に生活する事に慣らされてゐたら、

今日ではもつと完全なものになつてゐたらうと思ひます」といふ風に信ずる人であつた。画家バレストツドがエリイダから「人魚の死」のヒントを得たといふ事は、左もありません事である。

エリイダはいつまでも海に対する思郷病に悩まされてゐた。ノスタルジヤ

さうしてその病は益々激しくなつて来て、遂に、断然海へ帰るか、それとも陸に止まるかといふ分界点にまで達した。すると陸の絆を切らう——と藻掻いてゐたのがプツツリ切た。女は今や何事も自分の自由意志で出来る人になつた。海の仕配の下にも、陸の仕配の下にも属しない人となつた。新しい眼を開いて、新しい立脚地に立つて世界を見る人になつた。すると事情が全く一変して来た。海はもう今までの魔力を失つてしまつた。さうして圧迫と屈従とばかりしかないと思つてゐた陸地は、自由と愛と生命とに充ちてゐた。少しも自己を毀損する事なしに、立派に妻たり母たるの道を発見する事ができるやうになつた。注意すべきはこの点にあらうと思ふ。自覚といふ事は必ずしも家庭の破壊を意味しないのである。又最愛の夫や子を捨てる必要もないのである。要は心の持方如何にある。エリイダが今までの夫婦の生活を、眞の生活ではないと自覚したのは、併し自己の責任を痛感して、生活の改造を企てやうと決心した態度は愈々立派だと云はなければならぬ。わが国の女性中に

も、女子教育が盛んになるに連れて、段々所謂「醒めたる女」が殖えて来たやうであるが、それはどうもエリイダの場合の第一の覚醒だけであつて、第二の覚醒には遙かに遠いやうなのは心細い。お刺トナリにその第一の覚醒でさへ頗る薄弱な根柢のぐらついた奴で、中々突き詰めた処までは行き得ず、稍もすれば元の無自覚な態度に復帰しやうとするのだから情けない。まだく日本の女は苦勞が足りない。精神の試練が足りない。

ノラの自覚とエリイダの自覚。同じく今までの生活の無意義であつたのから醒めたのであるが、結果には非常な差違を來した。二人の性格や境遇の異なるにもよらう。それから又、ノラの方が夫の愛の眞の愛でなかつた事を自覚したに反して、エリイダの方は思ひも掛けぬ夫の心の誠を見たにも依らう。兎に角ノラとエリイダとの対照は、私達に色々の事を思はせるのである。それから彫刻家のリングストランドがボレッタに向つて、結婚は一種の奇蹟で、妻の方が次第に夫に似て来るとか、或は又、妻は夫の事業のために生くべきものだとかいふ詞も、エリイダの事件とは離れて、別様な味ひのある詞である。この思想から家庭問題を考へて見るのも興味があらうが、暫く他日を期する事とする（をばり）